Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-02

第4章阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

高野, 尚子
吉村, 俊美
田原, 勝典
清水, 誠一
奥村, 弘

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,6(平成19年度事業報告書):59-68

(Issue Date)
2008-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002287

第4章

阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

第８回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会
プログラム

日時：2008 年 02 月 13 日（水）　13：00 ～ 17：00
場所：人と防災未来センター　防災未来館　５階　プレゼンテーションルーム（研究会）
　　神戸市中央区脇浜海岸通１－５－２
内容：第１部　リニューアル展示見学
　　第２部　研究会
　　①　資料と展示　　報告者：人と防災未来センター資料室
　　②　資料室の現状と課題　　報告者：人と防災未来センター資料室
　　③　他機関の現状　　報告者：神戸大学附属図書館震災文庫など
　　④　意見交換

参加者一覧

伊丹市立博物館	水本有香
神戸学院大学人文学部	水本浩典
	足立紘亮
	池島知代
	柴岡優
	難波志帆
	林田怜菜
神戸新聞	石崎勝伸
神戸大学人文学研究科地域連携センター	奥村弘
	河野未央
	坂江渉
	佐々木和子
神戸大学大学院人文学研究科	板垣貴志
神戸大学附属図書館	田原勝典
人・街・ながた震災資料室	藤原美紀
	清水誠一
	田村彰啓
	小寺忠則
人と防災未来センター研究調査本部	村上友章
人と防災未来センター資料室	高野尚子
	福田正
	吉村俊美
兵庫県文書課	奥村利己
龍谷大学	柴田和子

報告Ⅰ

資料と展示；展示リニューアルの概要と課題

高野　尚子
（人と防災未来センター資料室　震災資料専門員）

1. 展示リニューアルに至る経緯について

人と防災未来センターは「阪神・淡路大震災の体験を元に、人のいのちやともに生きることの大切さを、その教訓と一緒に伝える」というコンセプトのもとに、防災未来館とひと未来館の両館で展示を展開してきた。特に、防災未来館では、開館以来、映像や、市民や行政などから提供された震災資料によって都市型巨大災害の総合的な記録が展示されており、ボランティアによる体験談の講話や展示解説も行われてきた。震災から10年が経過したのを機に、展示内容や運営方法を見直すために、有識者による「人と防災未来センター展示検討委員会」を設置し、これまでの運営実績や来館者のニーズも踏まえつつ、展示内容の充実や情報発信機能の強化などを検討してきた。

2005年から2006年にかけての計5回の展示検討委員会では、次の4つの課題が指摘された。1、「復旧・復興過程の展示が、震災後5年程度で止まっている」、2、「展示物が多すぎて、展示のメッセージがきちんと伝わらないのではないか。」、3、「大震災の経験や教訓をどう防災・減災にいかすのかを伝える展示があまりない」、4、「研究機能を展示にうまく活用していない」という点である。

これらの課題に基づいて、防災未来館の展示リニューアルの方向性が次のように定められた。1、「時間経過に伴う復興への新たな課題と情報の追記」、すなわち震災6年以降の復興状況を整理し、展示に追加していくこと。2、「誰にでもわかりやすく伝える展示の展開」、例えば、わかりやすい館内案内や、来館者のニーズに応じた時間別・目的別観覧コースの設定など。3、「防災・減災に関する情報発信の強化と体験学習機能の充実」、震災以降の防災や減災情報の追記や、参加体験できるワークショップの充実。4、「研究員やボランティアなどセンターの人的資源の活用」、展示スペース内に研究員が研究成果を発表する場の設置、来館者からの質問スペースの開設、ボランティアの解説によるワークショップの充実などである。最後に、来室者が落ち着いて資料室を利用できるように、あるいは展示スペースの確保することを主な目的として、リニューアル時に「資料室の5階への移転」も決定した。

2. リニューアル展示のポイント

「時間経過に伴う復興への新たな課題と情報の追記」の展示例としては、次の2点があげられる。4階の大震災ホールでは、これまで上映されていた、一人の少女を通じて震災5年程度までの過程を描いた「このまちと生きる」を、これまでの映像に加えて、被災直後から現在の復興状況に至る経過を紹介する映像を加え、更新した。そして、3階の震災学習テーブル、3階の中央にある、本のページをめくって読むような展示内容を更新した。

「だれにでもわかりやすく伝える展示の展開」の展示例では、各フロアの入り口付近にインフォメーションガイドを設置し、館内案内をわかりやすくした。また、「短時間コース」「早足コース」「じっくりコース」と、所要時間別の観覧コースを設け、そのコースによって、誘導矢印を床面に色分けをして提示した。例えば赤い誘導矢印は短時間で見たい方の案内用で、この矢印の先は、短時間でわかりやすく復興までを伝える、リニューアルで新設された展示につながっている。

新設された「復興への道」展示として、ジオラマが作成された。研究員の意見を参考に、全体のジオラマと人の暮らしが見えるような近距離の2つのジオラマで震災直後、震災から2週間後、3から6ヵ月後、1から3年後、震災から10年以

降、の5段階に分けている。

ここでは、展示解説ボランティアに約8分間で全体の解説が出来るよう、マニュアルを渡している。他に時間がない方でも、資料展示の中で、これだけは見て帰っていただきたいという趣旨で、「スポット展示」が3階の各壁面にひとつずつ新設された。震災当時の火災で溶けてしまった鷹取商店街のアーケードの一部は、リニューアルの時に資料室震災資料専門員が展示業者にこの資料を推薦したものである。また、3階展示資料の文字音声ガイドがより操作が簡単な機械に新たにリニューアルされた。

「防災・減災に関する情報発信の強化と体験学習機能の充実」では、神経衰弱ゲーム、防災すごろく、防災カルタゲームなどの体験キット、ボランティアによる液状化実験などをおこなう実験ステージというものが新たに設けられた。

「研究員やボランティアなどセンターの人的資源を展示に活用した点」では、2階に災害ニュースボードが作られ、センターの研究員による災害調査報告が展示フロアで読めるようになった。情報は更新していく予定である。また、原則週に2回、センターの研究員が展示内容に関する来館者の質問に答える相談カウンター、DRI展示解説カウンターが設けられた。

資料室の2階から5階への移転は、昨年の10月30日に行われた。2階に資料室があったときと、基本的に設備や資料はそのままである。休室日はこれまでどおり月曜日で、利用も無料である。

3. 資料室が関わった展示資料に関わる事業

今回のリニューアルでは、復興過程に関する展示の情報の追記がポイントの一つであった。一般市民などから寄せられた3階の展示資料の解説についても追記することになり、そのための調査事業が立ち上がった。資料提供者への「体験談聞き取り調査」という事業である。

これは、防災未来館3階の展示資料の提供者から、震災から13年たった今現在の思いやこれまでの暮らしについて再度聞き取りを行い、展示解説に追記するものであった。

この調査を進めるに当たって、資料室は、資料提供者へ送付する聞き取り調査依頼書の作成や調査フローの提案など、主に、実際に調査に入るまでの協力を行った。その後は展示業者が主導して、事業が進められた。さらに、展示ではこの聞き取り内容を4ヶ国語で表示できるようにするため、外国語を専攻する大学院生などもこの事業に参画した。展示業者、センター、学生たちなど、複数の組織やグループが関わってこの事業を進めており、事業のプロセスも貴重な経験となった。

4. 最後に

報告の最後に、展示リニューアルで私が感じた課題と今後やっていくべきと思う課題について触れておきたい。今回リニューアルが進んでいくのを見る中で、時間の制約の中で、いろいろな立場の人の意見を取り入れながらリニューアルを推進していくことの難しさを感じた。特に、時間のないこともあり、現場の人の意見までなかなか拾い上げていけないように見受けられた。例えば、今回のリニューアルでは、日ごろから館の運営に携わっており、現場で来館者の声を一番聞いているボランティアやアテンダントなどの方の意見を聞く機会がそれほどなかったように見えて残念であった。また、資料室としては、スポット展示の一部や体験談聞き取り事業の一部に関わることはできたが、資料展示のリニューアルに関してはあまり関われなかったことも心残りである。もともと、資料整理は資料室が管轄し、その資料を展示する資料展示部門は企画運営部が管轄しているため、普段から常設展示資料に関して資料室はあまり関与していなかったが、リニューアルの体制として、資料室ももう少し関われるようにすれば資料展示を改めて見直すこともできたのではないかと考える。

今後やっていくべきことは、市民や来館者へのリニューアル展示のPRだと考える。リニューアルオープンはしたが、まだまだPRが足りていないことを実感している。例えば、DRI展示解説カウンターの利用者はまだまだ少ないように聞いているし、ホームページなどでの宣伝もまだなされていないためか認知度が低いようである。また、展示解説ボランティアによる館内のツアーガイドもあらたに実施されているようだが、団体来館者へのPRもこれからである。

リニューアルオープンはしたものの、このように運営面ではすでに課題が出てきているようで、

今後対応していくべきと感じている。

報告Ⅱ

人と防災未来センター　資料室の現状と課題

吉村　俊美
（人と防災未来センター資料室　震災資料専門員）

人と防災未来センター資料室は、2002年のセンター開館と同時に開室した。センターには展示や研究、研修等の事業とならんで、「資料収集・保存」事業があり、資料室がその事業を担う体制となっている。

私は2005年度より資料専門員として約3年務めており、来月で任期満了となる。そのため、この報告では、この3年間の状況をまとめた上で、今後の参考となるよう、個人的な感想や反省点を課題としてあげておく。

2004年9月、センターの活動の指針、ミッションが策定された。資料収集・保存部門の「目的」としては、「震災の記憶を風化させない」ことと「被災者の想いと震災の教訓を共有し次世代に継承すること」。「被災地において地域社会と関わりを保ちながら」、「内容」としては、「震災防災に関する資料を継続的に収集・蓄積し、データベース化すること」と「防災情報を市民にわかりやすい形で整理し、発信する」としている。

2年後の2006年6月、このミッションをより具体的にした「ビジョン」と「ガイドライン」が策定された。「ビジョン」は4カ年先を目指したより具体的な達成目標、中期事業計画であるガイドラインは、具体的な数値目標も伴った計画である。ビジョンでは、資料収集・保存部門に関して「阪神・淡路大震災の震災資料の網羅的収集とその他災害関連資料の収集」、「利用者が活用しやすいように整理することで震災の事実を伝える」、「地域社会との関わりを保ちながら資料にこめられた思いや教訓を共有する」、「大規模な震災資料の活用方策をたて、現代資料の扱いにおける先駆的な機関をめざす」の4項目が定められた。

ガイドラインでは、データベース化と資料名称の精査の作業、そして公開に関わる部分が具体的に数値目標がたてられている。この三月末で、目標達成期間の半分にあたる二年が経過するが、概ね順調に作業は進んでいる。

収集は、主に提供の申し出を受けて、調査を行うことになっている。提供者の申し出あってのことでもあり、ガイドラインでも具体的な目標はない。現段階では、資料の所在情報を得ても、廃棄されるというような場合でなければ、申し出がない限り、こちらから積極的な動きをするということはなかなかできていない。今後、資料提供件数が減少していった場合、どのような収集活動をするかは課題となる時期がくるかもしれないと個人的には考えている。

資料整理は、2002年度から04年度まで、緊急雇用交付金事業を使い、比較的人員が多い体制で作業を行なった。2006年からは、ガイドラインの達成のために、資料室内で「定常業務」ということで四つの作業区分を設け、主担当を決めて作業進行を管理した。このうち新規資料のデータベース化は、個人で提供される資料は1件あたりの点数も少ないが、団体による提供資料の受入は量も多く、なかなか受入作業が進まないことが課題であった。比較的均一なデータだと、この画面で1点1点入力するよりも、マイクロソフトエクセル上でデータを作成し、一括して登録を行った方が作業が迅速にすすむ。そこで、昨年度データベース業者に依頼し、大量の資料のデータベース化を円滑に行うためのプログラム機能を付与した。12月から月10日間ほど勤務の資料整理補助員によって、データ入力がおこなわれている。

資料名称の精査は、モノ資料を対象にして行っている。作業では、利用者が利便性を高めるため、資料がより正確に検索できるようにするために、

実物資料を確認し、名称が実際とかけ離れている場合に名称を変更している。作業に付随して、資料が搬送用のエアキャップで梱包されている場合は空気が籠るなど保存の観点でよくないとのことので、薄葉紙に変更することも同時に行っている。作業を通じて、実物の資料に触れ利用者に紹介しやすくなった。展示などの活用にはエピソードが伴わないと難しいこともと感じている。

公開については、提供者との協議と、資料の公開判別と二段階の作業が関係する。資料の公開は、資料提供時に、「センターに一任する」、「別途協議」、「インターネットのみ公開不可」の三種類から確認されていた。2004年度末で、別途協議資料は約7万点で、提供先の件数としては約820件であった。この別途協議資料は、資料目録の公開もされないため、利用者に資料の存在が知らないという状況になっている。

センター開館後の2004年、公開の運用基準も決まり、05年度から教育機関を中心に協議を開始していった。06年にはガイドラインに9割以上の公開判別達成と目標設定がなされたが、この目標は達成が困難ということで課題になっていた。

協議を行なうと、対象全てからセンター一任となったわけではなく、一部は例えば写真を提供している個人の方から、写真の公開は構わないが匿名希望として欲しいといった要望も見受けられた。

これまで協議方法として、センター一任を依頼する文書を一括で送付する方法をとってきたが、資料提供時から年月がたっていることを考えると行き違いも生まれやすい。また、実際匿名にしてほしいが写真の公開は構わないというような要望もある。件数も減少してきているので、1件1件丁寧な協議を行っていければよいというのが、この3年間の反省点である。また内部では、別途協議の名称が提供者に分かりにくいという意見が出ているので、今後この点も検討したい。

次に、協議以外の公開判別で、定常業務の写真資料の公開判別は、提供者から公開をセンターに一任されていても、公開判別が保留となっている写真が約3000点、3万3000枚あった。そのため作業は、「比較的判別しやすいと思われる資料」から作業をすることにした。その時参考になったのは被写体区分であった。昨年度は兵庫県広報課写真の判別を行なった。多くの写真がインターネット上で見られるようになり、貸出申請者が遠隔地にいても希望写真を選べるようになった。

「活用」については、昨年度は定点観測写真展、今年度は震災記録写真展を資料室の「企画展」として行なった。展示資料は、センター所蔵の資料のうち、神戸市内各地で撮影された定点観測写真を17地点分、枚数にして約40枚ほど、主には、ガレキの街並みから更地へ、そして復興へといたる経過がわかる写真を中心に展示した。写真の被写体に関連して、現在、スポット展示でも展示されている長田区の鷹取商店街の看板「街」と、灘区の側溝の蓋(ふた))の実物資料2点も展示した。2回の企画展では、原資料を傷めにくいという点で、写真展示を計画したが、紙資料やモノ資料、映像音声資料の展示も考えられる。

今年度秋頃から、ガイドラインとは別に、センター内部で、「防災教育」機能を高めることが、資料室に求められるようになった。秋に資料室が移転したため、主として来室者数の増加を狙いとして、震災映像資料の上映会を、先月1月12日(土)開催した。当日2回の上映で、約150名、3分の1以上が高齢者であったが、同時に家族連れで来られた小さなお子さんの姿も見られ、幅広い年代の方が参加した。映像音声資料は、公開運用基準では、センター一任で資料提供者が著作権者である場合に原則公開可である。テレビの録画番組資料等については保留となっている。これについても来年度以降も検討の継続が必要であると考える。当時の状況をおさめた映像は、教材作成時にも需要があり、上映会のアンケート結果でも「映像に迫力があった」とか「当時を思い出した」と好評であった。上映会の今後の予定は未定だが、所蔵資料の活用につながることを期待する。

最後に資料専門員としての3年間を振り返ると、まず初年度は、1年間業務を引き継ぐことに終始した。その中で、とりわけ2年目以降に研究会や他機関見学で意見交換をできたことは、新たな課題に直面したときにも解決の方策をみつけるのに有意義だったと改めて感じている。

次に資料の量について、あらためて16万点の資料を扱うことの難しさを感じている。今後網羅的に保存処置を行ったり、活用することは難しい

ので、何かテーマや重点を設定して、活動を行うことが必要かと考える。また利用者との対応を通じて、新たな資料の発見や活用つながっていったが、一方で、例えば中期目標ガイドラインの指標からみると成果としてあらわれにくかった。この問題は、次回中期目標をたてるときの参考になればと思う。また業務の中で、ガイドラインでの公開についての数値目標の達成が中心となったが、では今後、公開が進んだ後に、資料室はどういった業務を中心にしていくのだろうと考えている。三年間でできることは限られていたが、また人が変われば違う視点で業務がおこなわれていく。こういった反省点をふまえて、今後勤務にあたる方々に、引き継いでいただければと考える。

報告Ⅲ

神戸大学附属図書館「震災文庫」の現状

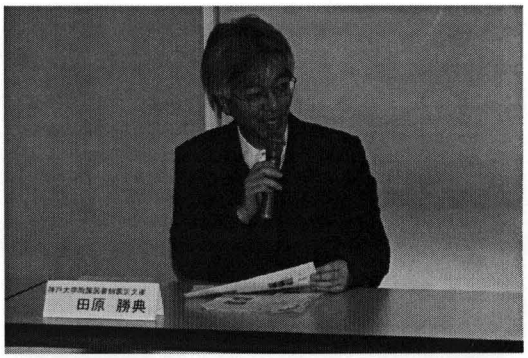
田原　勝典
(神戸大学附属図書館情報サービス課電子図書館係)

この報告では、神戸大学附属図書館震災文庫の現状を簡単に説明する。震災文庫は1995年、震災の年の10月にオープンした。オープン時には図書館の片隅を借りて、公開された。2004年10月から、図書館に隣接して研究棟の建物が建設され、その一角に移転した。現在のスペースは設備も整い、広さも十分である。しかし、建物でつながってはいるが、以前に比べ場所が離れたところに移り、設備は充実したけれども、果たして使いやすくなったかどうかは正直なところ疑問である。

開館時間は平日の11時から17時まで。また、図書館のホームページ内に電子図書館というシステムがあり、その中で震災文庫のページから、資料検索や映像の閲覧が可能である。このサイトは本年2月1日にシステムがリプレイスし、新たなサイトになった。内容に変化はあまりないが、トップページに検索の窓を設け、検索のスピードも前システムよりもかなり速くなった。

このシステムでは地図から写真を検索、表示するということも可能である。従来からも可能であったが、今回はグーグルマップを使って実現した。かなり直感的に検索できるので、一般利用のために作ったのだが、小学校、中学校などの授業でも使いやすいのではないかと、個人的には思っている。

また、神戸大学の震災文庫やセンター資料室、人・街・ながた震災資料室など、さまざまな機関が資料収集をおこなっている。このデータの一括、横断検索が、以前から望まれていたが、今回そのデータをやりとり出来る口をシステムに何個か設けることができた。例えば、ある形式の検索リクエストに対してＸＭＬという汎用的なデータ形式で返すような仕組み、それ以外にもう二つのリクエストの方法を図書館でよく使われている通信規約を使って持たせている。とにかくデータを渡せる、渡せるだけでなく簡単に渡せるシステムにしようというのが今回の一つの変更のポイントになっている。もし一緒に横断検索の話題がでたときには、神戸大学の震災文庫では対応できるようになっているので、一緒に考えていきたいと思っている。



さて、統計を見ていただくことで、震災文庫の現状を報告する。資料点数は、現在4万点を越えている。ここ数年の資料受け入れ点数は、概ね1,500から2,000点、多くは行政資料、役所の発行物である。ただ行政と言う分類の中には、役所が発行のもの以外にも地域活動の資料なども入れている。その結果、行政資料が一番多くなっている。入館者数、すなわち利用者数は、学内の利用者よりも学外の利用者が多い。学内の利用者は大抵が院生である。学部学生もいるが、院生がゼミでの震災関係の発表などの準備のため、震災文庫に資料を調べに来る例が多い。

利用者は1日に平均して1人～2人位である。少ないといえば少ないが、これが現状である。ホームページのアクセス統計は、震災10周年の年をピークにどんどん下がって来ている。この統計は10月までのものだが、このままいくと昨年のアクセスを下回ると思われる。以上簡単であるが、震災文庫の現状の報告としたい。

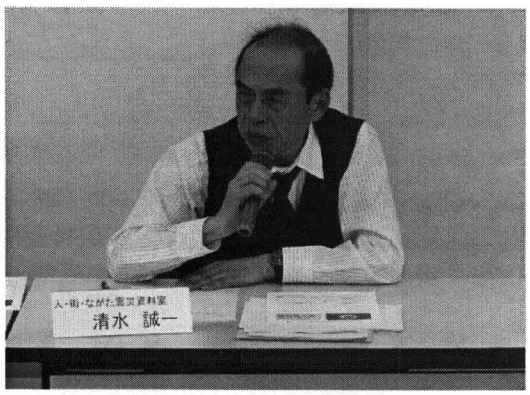
意見交換

1. 長田区で活動している震災資料の保存団体について

清水　誠一

（人・街・ながた震災資料室）

人・街・ながた震災資料室（以下震災資料室）の現状について、説明しておく。震災資料室は、長田区役所のなかにあり、職員有志20～30人のボランティアが運営管理する資料室である。運営管理には、区役所と職員労働組合が協力するという関係にある。収集・保存対象としているのは、長田区の震災関係資料。収集、保存だけでなく、一般公開をおこなっている。区役所は市民との交流の深いところで、区民の方からの資料提供も多く、すべて公開を前提としている。震災当時、長田区へは全国から応援に来ていただき、その時のつながりが今も続いている。



現在震災資料室の資料点数は約3万点ほどである。資料整理やその分析は、神戸学院大の水本先生たちの協力を得て行なっている。今まで年1回の開催した資料展を、2007年から常設展に、資料室だよりも不定期の発行から毎月17日に定期的に発行するようになってきている。

2. 展示の感想

- 前に見た時に比べ、展示が明るくなったような感じがある。ただ、一緒に展示見学をおこなった中学生たちが、ほんのわずかしか展示を観覧していなかった。それらの中学生や小学生たちに、ボランティアの方たちの力を借りたりしながら、見てもらう工夫が必要ではないか。
- 以前の映像は、どちらも見ていて気持ちが悪いなと思っていた。今回、大震災ホールの映像が大幅に変更されていた。お棺の袂で泣いている方々の映像など、直後の映像を差し挟むことで、リアリティーが出てきた映像になっていた。資料展示では、まだごちゃごちゃ感は否めないと思うが、スポット展示という新しい展示には、インパクトがあった。ここを見るようにという指示もあり、以前よりはよくなっているなという感じである。
- 2階の資料室跡の展示は、あれだけのスペースを取る必要がないように思える。資料を活用して下さるためには2階にやはり資料室があった方がよかったのではないか。DRIの研究員の方の常駐されて相談をうけるという試みは、カウンターの場所がわかりにくい。
- 復興の過程を表わす粘土細工のジオラマは、正確ではなく、むしろ間違ったイメージをあたえてしまう恐れがある。たとえば、避難所はあれほどゆとりはなかったし、コタツなど電気器具の使用はできなかった。
- ボランティアの方々へのマニュアルによる説明は、リアルな体験の語りを封じることにつながる。体験というのはそれぞれ違うはずなのに、そのことを排除して行く論理が見える。
- 復興誌をケースに入れた展示では、何を伝えたいのか、よくわからない。
- 前から感じているのだが、人と防災未来センターの展示は、4階から3階、3階から2階へと一方向に見ていくように決められている。3階で資料をみて、もう一度映像を見直すとか、じっくり考えながら行ったり来たりする構造になっていないのが残念である。

3. 展示と資料についての質疑

質問：リニューアルにあたって、展示内容の検討など作業の進め方はどうだったのか。その過程に資料室はどのようにかかわったのか。

→展示の検討は内部で課題などを挙げて、報告書をまとめ、それに基づいてリニューアルを行っていこうという方針になった。実際の展示の製作、実行は展示会社が担当した。

有識者による展示検討委員会以前に、資料室など現場からの課題を議論する場が設けられた。そして展示会社と資料室が協働する形で、具体的に「こんな資料がありますよ」と資料の推薦をおこなったりもした。ただ時間が差し迫ってきて、資料室に意見を求められても、なかなかうまく意思の疎通がいかなくなったのが現実であった。

質問：展示解説ボランティアの役割はどのようになっているのだろうか。

→復興への道という５つのスポットが、ジオラマで表現されている。そこをガイドするように、ボランティアさんがつくというように決まったと聞いている。その復興への道のガイドは、マニュアルが準備されており、そのマニュアルに従って説明することになっている。ただ、１月９日にリニューアルして始まったばかりで皆さん手探りしながら、来館者に対応されている状況だということである。

質問：体験談の聞き取り調査について、当初の予定では一から被災した人の全員に聞き取るよう話を聞いたことがある。しかし、時間の制約なのか、結局は既にもう聞き取りをした方への再度聞き取りになったという。また、他に大学などで行なっている体験談聞き取り調査との連携は模索できないだろうか。

→確かに体験談聞き取り調査は、今年度４月頃は構想が錬られていたようである。既に展示されている資料提供者だけではなく、新たな資料提供者を模索するような話もあったと聞いている。しかし、経緯はよく知らないが、結果としては、おっしゃるようになった。

体験談聞き取り調査について、今後、似たような調査をしているような団体と連携が可能かという点も、資料室はこの事業の担当ではないので、よくわからないというところである。

質問：資料室の専門員の方が、「リニューアルして見て頂きたい」展示とか、「思い入れがある」展示とかいった、思い入れが反映されているような部分はどこなのかということをお聞きしたい。

→やはりスポット展示だけは「何とかやりたいね」と専門員で話していた展示である。ただ、展示業者と資料室専門員間でなかなか上手くチームワークを組んでいけなかった部分もある。たとえば、私たちが推薦したスポット展示の資料と展示業者のそれとが異なり、スポット展示と展示に採用された資料もあればそうでない資料もあった。

また、資料室の館内移転もあり、業務について数値的に目標設定されている部分もあり、日常業務を行ないながら、リニューアル展示に携わるというのは、結構時間的にも困難な部分があった。しかし、今後はこの経験を企画展示などに生かして行きたい。

4. まとめ

奥村　弘
（神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）

今回、人と防災未来センターのリニューアル展示見学後、資料室の報告と意見交換を行なった。これらを踏まえて、次のようにまとめてみる。

資料展示の点では、ベンチの実物を展示できたのは、非常に資料室の努力の成果ではないか。実物のもつ力、単にモノがあるだではなく、そこに関わった人、出来事を内在させた「本当のモノ」は、映像や複製品では代替不可能である。博物館の機能から考えると、当然のことであるが、人と防災未来センターの展示も含め、最近の博物館ではなかなかそうはいっていないようである。

そもそも、展示はその研究部門と資料の蓄積が

三位一体で行われていくものである。ところが、展示は展示、研究は研究、そして資料従事者は資料従事者でバラバラにされている。従来展示の課題に「展示物が多すぎてメッセージがきちんと伝わらない」といわれたと言う。しかし実は展示物が多いから伝わってないのではなく、阪神・淡路大震災の中で何を展示するかということが精査出来てないから多い、伝わらなかったのではないか。むしろ原因と結果が逆ではないかと考えている。

例えば、長田は火災による被害が大きく受けている。展示をみていても、その点についてはわからない。そもそも長田になぜ沢山小さな木造建築物があるのか、可燃物が多かったのか、長田の歴史という前提条件がわかっていなければ、大火災がなぜ起こったのかはわからない。街が壊れたとか、大火災がおこった、大変だったという話はあるのですが、そもそもなぜそういうことになったのか、というような説明が極めて弱い。そうするとメッセージがちゃんと伝わらないということになるのではないか。

また、破壊の表現を行なっている光と音の映像でも、被災地全部が丸ごと揺れたような、すべて破壊されたようなイメージの表現になっている。しかし、今回の直下型地震では、非常に隣接した地域でも揺れや被害に大きな差があった。神戸大学がある灘区で考えてみても、ＪＲと阪神の間、山手の神戸大学のある場所では全然違う。直下型地震特有な特殊な揺れ方をしていることが、あの映像から全然伝わって来ない。

その個別の実際の状況やなぜそういうことが起こったのか明確に伝わらないとすれば、どうやっても防災や減災にはつながっていかない。つながらないのは当然で、経験や教訓が伝わってないのだからどうしたって防災や減災につながらない。これではいくら展示のところで防災や減災の必要性を説いても、震災とつながってなければ、本当の意味で理解されない。それを克服するためには、資料室の資料の研究とそれを使った大震災そのものの研究が必要なのだが、ご存知のようにこの施設には阪神・淡路大震災の研究している人はほとんどいない。実は資料室の皆さんが一番、基礎的な研究をやっているように思える。その資料室と展示部門の連携が、実際には時間の制約などで必ずしもうまくいかなければ、展示のリニューアルには、聞いたところ数億円単位かかっているということだが、決して良いものは生まれない。

このように展示にも、研究にも最も基礎的な部分を担う資料室専門員が、３年交代という責任の負えない立場になっているのは残念である。最低１人か２人は専任が必要だとは、開室前からという要望しているが、実現にはいたっていない。それが今回のリニューアル展示にも反映されているのではないか。

いずれにしても、今回のリニューアルには一種の危機感をもって展示をみせていただいた。本当に伝えるべきことをどうやって伝えていったらいいのかということを、もっと努力する必要があるのではないか。人によっては「仕方がない」と考えられるかもしれない。しかし大事な施設なので、来場者に阪神・淡路大震災について、わかってもらえる、考えが深められるような努力を継続していくことが望まれる。

今後の研究会の課題として、神戸大学震災文庫から提案のあった震災資料のデータ共有化についても、検討していきたい。